

頸部血管エコーで Carotid Web を指摘した若年性脳梗塞の 1 例

◎前田 るりこ¹⁾、山本 多美¹⁾、満瀬 亜弥¹⁾、泉田 恵美¹⁾、尾形 裕里¹⁾、志水 秋一¹⁾、富田 文子¹⁾
恩賜財団 社会福祉法人 済生会熊本病院¹⁾

【はじめに】若年の塞栓性脳梗塞症例に対して、頸部血管エコーで Web 病変を指摘し、内膜剥離術となった症例を経験したので報告する。

【症例】40 代、男性。特記すべき既往歴はない。

【現病歴】X 年 6 月、倒れている患者を家族が発見し、右麻痺、失語の状態の前医へ救急搬送され、急性期脳梗塞と診断された。前医の MRA 検査で M2 閉塞所見を認めたので、rtPA 静注療法を開始し Drip and ship treatment で当院へ転院搬送となった。到着後の脳血管造影検査では左内頸動脈起始部に造影剤の停滞を認めた。引き続き行った血栓回収術で、部分再開通を認めた。

【頸部血管エコー所見の経過】入院翌日の検査では左内頸動脈起始部に半月の膜様構造物を認めたが、有意な狭窄所見はみられず経過観察となった。X+1 年 1 月には同部位の膜様部分周囲に淡いエコー像とその表面の可動性を認めた。X+1 年 7 月には膜様部分周囲の淡いエコー像は消失していた。経過から Web 病変と後方にできた血栓像であったと推察した。脳梗塞再発のリスクも考慮し、

内膜剥離術となった。

【手術所見】左内頸動脈背側に Carotid Web と思われる構造物とごく軽度に肥厚した内膜が確認できた。

【病理診断】結合組織の増殖と間質の浮腫性変化を認めた。一部内膜に連続して、フィブリン様物質を認めた。

【考察】Carotid Web は内頸動脈の内側に突出した形状のため血流うっ滞や血栓形成を引き起こし、脳梗塞の原因となる可能性が考えられている。また、再発リスクも高い。しかし、認知度が比較的 low、病変自体が小さいため軽度狭窄病変として扱われている可能性がある。今回の症例でも、Web 病変の後方に血栓形成とその消失と考えられる経過を認めた。症候性の Web 病変の平均年齢は 38.3~46.7 歳と報告されている。塞栓源不明の若年層脳梗塞での重要な原因病巣として、Carotid Web も念頭に置き検査を進めなければならない。

【連絡先】済生会熊本病院 中央検査部
096-351-8000 (内線 2001)